

真理はあなたがたを自由にします

ヨハネ福音書8:30-36

【新改訳2017】

- 8:30 イエスがこれらのことを話されると、多くの者がイエスを信じた。
- 8:31 イエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です。」
- 8:32 あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」
- 8:33 彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、今までだれの奴隷になったこともありません。どうして、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」
- 8:34 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。」
- 8:35 奴隷はいつまでも家にいるわけではありませんが、息子はいつまでもいます。
- 8:36 ですから、子があなたがたを自由にするなら、あなたがたは本当に自由になるのです。」

【祈りながら考えよう】

- (1) どうすれば「主の本当の弟子」になれるか。
- (2) 32節の「真理」とは何ですか。また「真理はあなたがたを自由にします」とはどういう意味ですか。
- (3) 35節の「奴隷はいつまでも家にいるわけではありませんが、息子はいつまでもいます」とはどういう意味ですか。

【解説】

(1) 本当の主の弟子とは

「イエスがこれらのことを話されると、多くの者がイエスを信じた。イエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた。『あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です。あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。』」(30-32節)

①これらのことを話されると、多くの者がイエスを信じた

「これらのこと」とは、この時に語られた説教の全体に言及している。「イエスを信じた」と言われる人たちは、この後の彼らの会話によれば、完全な信仰を持っていなかったことを示している。主イエスは、イエスを信じると告白した多くの者たちの信仰が正しい知識に基づくものではないことを知っておられた。彼らはユダヤ教の誤った知識に基づいて信じたに過ぎなかった。

②あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です

主イエスは、信仰の告白をしたユダヤ人たちに対して、「わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です」と言われた。ただ、御言葉を聞いて、その時に「信じた」というだけではだめで、「本当の弟子」というのは、「主イエスのことばにとどまる」という特徴がある。

「とどまる」というのは、そこに居続けること。それは、一時は信じて、後は主イエスの下を離れてしまうということではない。主イエスの言葉を聞き続けると言ってもいい。そして、聞き続ける中で、主イエスの言葉によって、自分の存在が根底から支えられている。

注意したいのは、キリストのことばにとどまるから弟子になるのではなく、本当の弟子である(救われている)ので、キリストのことばにとどまるのである。ここを誤ってはいけない。

③あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします

この箇所「真理」とは、「主ご自身と主が成し遂げられた御業」についての教理的真理全体のことである(ヨハネ1:17、14:6、17:17)。

新約聖書の「真理」(クギ)アレーセア)は、「神に属する真理」を表現している。アレーセアは語源的には覆われた覆いが取り除かれてあらわにされたものを意味している。アレーセアの意味するところは、「真理」は救いのために啓示された神のみこころとしての「福音そのもの」を意味している。

パウロはガラテヤの教会を脅かしていたユダヤ主義の教え(律法を守ることによって救われるとの教え)が真理そのものに背くものと見抜き、「福音の真理があなたがたの間で常に保たれる」(ガラテヤ2:5)よう勧めている。「真理はイエスにある」(エペソ4:21)。このイエスにある真理に私たちを導いてくださるのは「真理の御霊」(ヨハ14:17、15:26、16:13)である聖霊である。さらに、この救いを宣べ伝える教会の「正しい教義」が真理と呼ばれている(ヘブル10:26、Ⅱペテロ1:12)。

ユダヤ人たちが主イエスのことばを信じ続けているならば、やがて主イエスの復活の後に、「福音の真理」を知り、



国会図書館入口の聖句

「その真理」が、彼らをユダヤ教の誤りから解放し、また罪の力からも解放すると教えられた。

「主が十字架と復活で成し遂げられた救いの福音が、あなたがたを霊的奴隷状態から解放する」というのである。福音の真理を知った者は罪と律法主義から解放され、光の中を歩み、神の聖霊に導かれる。

(2) 罪を行っている者はみな、罪の奴隷です

彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、今までだれの奴隷になったこともありません。どうして、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。(33-34節)

①私たちはアブラハムの子孫であって、だれの奴隷になったこともありません

これは事実ではない。アブラハムの子孫であるイスラエルは、多年にわたってエジプト、アッシリア、バビロン、ペルシャ、ギリシャ、そして今はローマと隷属の歴史の中を歩んできた。それだけでなく、彼らは罪とサタンの奴隷となっていた。

②あなたは どうして、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか

ユダヤ人たちは、自分たちが何者かの奴隷になっているとする「主のみことば」に反発した。さらに「自由になる」という語句に飛びついた。「あなたはイスラエルの王国を回復しようというのか。ローマ人から私たちを自由にしようというのか」というのである。

③あなたがたに言います。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です

主は彼らを救出したいと願っておられる奴隷状態とはいかなるたくいのものであるかを語られた。彼らの現在の心の状態は、奴隷状態なのだ、ということを示された。

「習慣的に罪を行っていること」で、彼らは「罪の奴隷」なのである。これが、彼ら自身が認めるべきことであった。「罪を行っている」というのは、「嘘をつく」とか「盗みをする」とか、「ある単発的な罪の行為をする」ことではなく、罪を習慣的に継続して行うことである。ヨハネが次のように言うのは、この意味である(Ⅰヨハネ3:8-9)。

(新改訳)「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。神から生まれた者はだれも、罪を犯しません。神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。」(山岸登訳)「その罪を行いつづけている者は、悪魔に所属しています。全て神から生まれた者は、罪を行いつづけません。なぜならば、その人の中に神の種が宿っているからです。そして、その人は、神から生まれたので、罪を行いつづけることができないのです。」

(3) 子が自由にするなら、あなたがたは本当に自由になる

「奴隷はいつまでも家にいるわけではありませんが、息子はいつまでもいます。ですから、子があなたがたを自由にするなら、あなたがたは本当に自由になるのです。」(35-36節)

主イエスは、その当時の裕福なギリシャ人の習慣を利用して、真理を説明された。その当時の裕福なギリシャ人は、自分の息子を傲慢にならせず、家督を継いだ時、家の使用人たちに信頼される者に育てるために、その身分を知らせずに数人の奴隷の子と共に、奴隷の子と同じように育てた。青年に達した時、初めて息子の身分を明らかにして、家の跡取りとしての特別な教育と訓練を与えたのでした。

そして、その息子が成人し、父親と共に家の管理の仕事に就いた時、彼は共に育てられた奴隷の中から、好きな者を解放することが許されたのである。

使徒パウロも、ガラテヤ4章やロマ6章で、これと同じことを例にして真理を説明している。聖書は、アダムの子孫がすべて罪の奴隷であると語っている。

「相続人は、全財産の持ち主なのに、子どもであるうちは奴隷と何も変わらず、父が定めた日までは、後見人や管理人の下にあります。同じように私たちも、子どもであったときには、この世のもろもろの霊の下に奴隷となっていました。」(ガラテヤ3:1-3)

「神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規範に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となりました。」(ロマ6:18)

①奴隷はいつまでも家にいるわけではありませんが、息子はいつまでもいます

主のお心の中にあつたおもな目的は、ユダヤ人たちに彼らの置かれている「奴隷状態」を示すことにあつた。「現在、あなたがたは儀式律法のくびきの下で生き、儀式律法とパリサイの伝承とに甘んじているので、奴隷にまざる者ではなく、ハガルとイシュマエルのように、いつ神の愛顧と御臨在とから追い出されるかもしれぬ者である。

わたしを受け入れ、メシヤとして信じるならば、あなたがたはただちに息子の地位に引き上げられ、子どもとして、また親愛なる息子や娘として、永遠に神の御愛顧のうちにとどまることになるであろう。

あなたがた自身が知っているとおり、奴隷はその家に確かな嗣業を持たず、いつ追い出されるかもしれぬ者である。他方、息子は父の世継ぎであり、その家に確かな嗣業を永遠に持つのである。

あなたがたが奴隷の関係から息子の関係へと引き上げられるように、とわたしが願っていることを知るがよい。」

②もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです

主は、自由という語で言われたのは、それは、罪・罪のとがめ・罪の力・罪の結果からの自由であって、主を信じる者が受けるものである。

「もし、人の子であるわたしが、罪の重荷から救い出すという意味でああなたがたを自由にするならば、その時、あなたがたは本当に自由になる」というのである。